

エコハウス研究会季刊紙

そらどま

2024年
冬号

第20号

2024 . W I N T E R v o l . 2 0

CONTENT

現代における「数寄屋建築」の価値と日本の住宅の行方
丸谷博男（代表理事）

表紙
奥多摩湖畔の家
設計 丸谷晴道

2台のピアノと暖炉のある暮らし

東京都奥多摩町にある多摩川上流域の奥多摩湖畔に建つ築66年の家のリフォーム。急峻な山を背に二階部分が懸造りとなり、前面は青梅街道越しに湖と対岸の山の景色が一望できる木造住宅。一日を通して陽の光が注ぐこの土地は、町内ではとても希少な存在である。もともとは町が空家等の有効活用による地域の活性化を図ることを目的に開設した「奥多摩町空家バンク」に登録されていた物件。ここは幸運にも、奥多摩の豊かな自然に魅了され、この地に移住し趣味の音楽、養蜂や養鶏、狩猟もはじめたいという都心に住む方に受け継がれた。リフォームに対する希望はグランドピアノとアップライトの2台のピアノがおける空間。それに応えるよう音楽を楽しみ、周りを気にせずにいられる住環境を創り出すために思い切って一階の畳床を土間まで下げた。椅子であっても視線は座の空間と同じように外から内部のプライバシーを保つとともに、安定した土間はピアノと暖炉と輻射パネルの設置を可能とした。新たに設けた吹抜け空間は、音と空気を緩やかにつなぎ、日中の土間による蓄熱と屋根の改修で生まれた集熱・空気循環システム「そらどま」と一体となり、小屋裏から縁側下へ繋がるダクト配管によって吹き出し空気が負荷の大きい大開口部へサーキュレーションする仕組みとなっている。

Photo by Shinnosuke Suzuki



SORADOMA

目次

00 背景

01 数寄屋建築とは／現状における呼称と実態

02 数寄屋建築と人々の暮らし

03-1 室内の室礼からの構成要素

03-2 室外環境と数寄屋／重層する空間と建具による変幻自在な空間

03-3 「押角」の部材が作る空間感性

03-4 その他の材料の役割

04 数寄屋の始まり

05 春夏秋冬に対応する温熱環境と数寄屋の仕掛け

06 改めて広縁の持つ働きを整理する

07 書院造から派生した数寄屋による建築の国風化、和風化

08 「押角」の世界が奏でる親自然の世界

09 現代住宅の矮小化

10 室礼／「道具」からみた数寄屋の世界

(この部分は今後の研究で整理し続報で論述していく予定である)

11 フレキシブルな「間」が家族構成の変化に応じて自在に対応する「日本間」

12 まとめ／総じて数寄屋の現代的価値と日本の住宅の行方

00 背景

今から40～50年前までは、伝統的な数寄屋も、モダンな数寄屋も、料亭・旅館の数寄屋もとても盛んに作られていた。世の中の関心も高く、建築雑誌や婦人雑誌でも記事として普通に扱われていた。それが最近ではどうであろうか。ほとんど新しい建築の世界では話題になることはない。新進作家の超現代的な数寄屋風は話題になるが、伝統的な価値観を持ったものは、新鮮さが感じられず、多くの雑誌に掲載されることはなくなってしまった。話題になるとしたらほとんどが江戸時代前後から、明治大正昭和時代の建築となっている。新しいものでも、すでに他界されている建築家の仕事が多いのではないであろうか。

これをどのように捉えたら良いであろう。そこには価値観の問題がある。「様式（スタイル）としての数寄屋建築」という捉え方からすれば、「当たり前になってしまい新奇さが感じられない」、あるいは「もう古臭い形態なので省みることはなく関心を持ってない」、そのような感覚なのだと思う。

もしそれが、形態というスタイルに本質があるのではなく、空間構造、空間と空間の関係、建築と外部環境との関係に本質があるとすれば、それは永続的な価値を持つことができるのではないであろうか。またそれは、世界にも通じる概念たりうる。

日本建築学会発行の大系日本建築史の内容が代表する様に、これまでは歴史＝様式の変遷という形で捉え方に終始していた。そこに、「現代的、普遍的な意味が語り得ない」という問題点があったと考える。本論は、数寄屋の普遍的で原理的な空間価値を読み解いていこうと試みるものである。

01 数寄屋建築とは／現状における呼称と実態

まずは、一般書から、どの様な理解が「数寄屋建築」とされているのかを紐解いてみよう。日本大百科全書（ニッポニカ）／出典 株式会社平凡社「改訂新版 世界大百科事典」からその解説を紹介すると、「数寄屋造（すきやづくり）」とは、と題し、以下の様に解説している。

茶室の様式を取り入れた住宅建築様式。数寄とは茶の湯を意味し、数寄屋は茶室をさした。室町後期（16世紀中ごろ）に千利休（せんのりきゅう）がわびの造形として草庵（そうあん）風の手法を茶室に用いて以来、面皮⁽¹⁾（めんかわ）柱、室床（む

ろどこ）、下地窓⁽²⁾（したじまど）、蒲天井（がまてんじょう）や野根板⁽³⁾（のねいた）天井が茶室の主要な構成要素となった。

茶の湯が盛行して茶室が社交や遊興の場になるにつれ、客の接待のために格式的な書院や鎖（くさり）の間（ま）（書院と茶室の間に設けられる部屋）も一体化されて、草庵風の手法が好んで用いられるようになるが、このように草庵風の手法を取り入れた建築を数寄屋造という。



図1 修学院離宮 下御茶屋

八条宮智仁（としひと）親王の別邸であった桂（かつら）離宮は、雁行（がんこう）する古書院・中書院・新御殿の書院群が元和（げんな）1615～24から寛文（かんぶん）1661～73にかけて完成したが、このうち古書院と中書院には面皮柱が使われたり長押（なげし）が省略されているものの、数寄屋的手法は濃厚ではない。これに対して新御殿では長押を面皮とし、襖引手（ふすまひきて）や長押釘隠⁽⁴⁾（くぎかくし）の意匠は奔放で、数寄屋風が一段と進んでいる。17世紀後半につくられた同様の例としては、京都・曼珠院（まんしゅいん）の大書院と小書院、京都・西本願寺黒書院などが名高い。

18世紀にはこの数寄屋の手法は、大名や貴族の邸宅に広く用いられたほか、民家や商家の座敷へも普及して、面皮丸太は床柱や長押、縁側の縁桁⁽⁵⁾（えんげた）や化粧根裏天井などにも及んだが、しだいに材料や造作に凝るようになって本来の質素さを失っていった。

昭和になって吉田五十八（いそや）1894～1974が大壁（おおかべ）造の近代数寄屋造の設計を始めてから、伝統を生かした斬新（ざんしん）な意匠が人気を集め、旅館や料亭はもちろん、個人住宅にも広く浸透した。（執筆者：日向 進）

残念ながら、この解説ではいきなり建築の専門家に話をしている感が強すぎて、一番大切な「数寄屋とは何か」に言及していない。

ブリタニカ国際大百科事典小項目事典では、「数寄屋造」を以下のように解説している。

厳正な書院造に対して、草庵風の丸太や土壁などの意匠を取り入れ洗練させた住居様式。柱に角材を用いず隅に皮つきの面皮（めんかわ）材を使い、長押（なげし）を略し（ときには面皮の長押）、張付壁でなく土壁を用いて天井も椋縁天井とする。桂離宮など上流階級の別荘建築や裏向きの居住空間において用いられた。同様なデザインは草庵の茶室などにもみられ、これらをもとに今日、料亭や一部別荘などに用いられる様式が成立した。

この解説も日本大百科全書（ニッポニカ）を簡略化しただけではあるが、かえって理解しやすい。しかし、まだ本質的とは思えない。概ね他社の百科事典も同じものと考えて良い。

本論では改めて数寄屋の数寄屋たる所以について探求していく。

この解説も日本大百科全書（ニッポニカ）を簡略化しただけではあるが、かえって理解しやすい。しかし、まだ本質的とは思えない。概ね他社の百科事典も同じものと考えて良い。
本論では改めて数寄屋の数寄屋たる所以について探求していく。

02 数寄屋建築と人々の暮らし

数寄屋建築は、百科事典にあるように茶道の世界から生まれた。茶を飲む習慣は、平安時代に始まり、鎌倉時代、室町時代に至り、茶道へと発展してきたことは知られている。その中で、とくに室町時代中期に至り、東山文化が興ると、禅の精神を元にした「幽玄」と「詫」の美意識が基調となっていた。それまで茶会に使われていた「会所」は「書院」へとかわり、茶会では作法が定式化されていた。それが茶道へと深まった歴史があった。室町時代8代將軍足利義政は東山文化の中、禅僧らと書院で茶の湯を楽しみ、交流を持っていた。茶祖と呼ばれる僧で茶人の村田珠光⁽⁶⁾は1436年に生まれ、能阿弥の紹介で足利義政とつながりを持ったとされている。珠光は唐物だけではなく和物と呼ばれる日本生れの道具も使う「草庵茶の湯」を考案した。珠光は四畳半の茶室も造り、精神的な茶の世界を創り出した。その精神を受け継いだのが、16世紀の堺の豪商で茶人の武野紹鷗⁽⁷⁾であった。紹鷗は珠光の作った茶の世界を完成させ、道にまで昇華させた。そして、紹鷗の弟子である千利休⁽⁸⁾が独自に発展させた作法が、師匠の築いた侘茶道にさらに哲学性や審美性を加え、無駄なものを省いた茶室や茶道具を伴う「茶道」として集大成した。茶道は江戸幕府の儀礼に正式採用され、武士の嗜みとして当然のものとなったのである。

数寄屋建築に直接的につながるのは、千利休の「草案茶室」（現存するのは「待庵」のみ）であり、数寄屋建築を千利休が創造したと理解して良い。

しかし、この草案茶室は、茶道専用の建築であり、住宅とは異なる。また、茶室に至る露路や庭園も、茶室から見ることはできない。その気配を感じるだけに仕組まれている。まさに抽象化された意識の中の感じる庭園が茶室内から知り得るものである。

本論では、茶室で表現される数寄屋建築ではなく、日常の暮らしと共にある建築空間を論究していくものである。しかし、建築材料の選択と扱い方には同じ価値観があると位置付けている。

03-1 室内の室礼からの構成要素

数寄屋建築の室内を形成する建築要素を以下に列記する。

A 空間の構成／図2 参照

- 空間の構成①土庇 どびさし
- 空間の構成②広縁 ひろえん
- 空間の構成③座敷／客間、続き間、前室、納戸、仏間

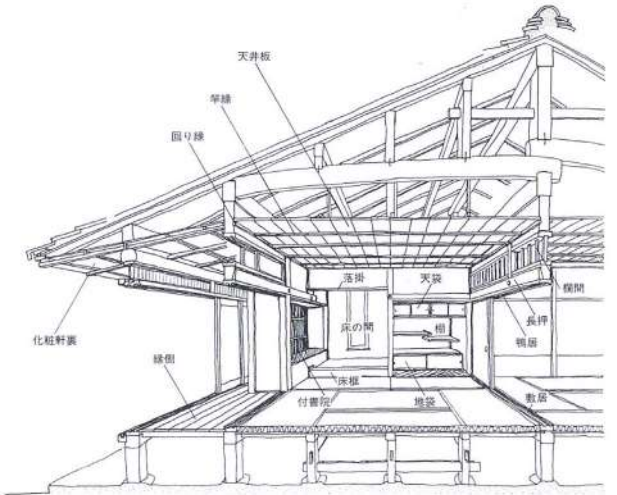


図2 書院の各部名称

B 座敷・客間の室内構成／図3 参照

- 座敷・客間①床／畳、呉座、床板
- 座敷・客間②床脇／土壁、板壁、腰張和紙、襖障子
- 座敷・客間③天袋
- 座敷・客間④地袋
- 座敷・客間⑤床板、畳床、地板
- 座敷・客間⑥洞口 ほらぐち
- 座敷・客間⑦床柱／磨き丸太、面皮柱、
- 座敷・客間⑧相手柱 あいてばしら
- 座敷・客間⑨床壁、その他の壁
- 座敷・客間⑩落掛け おとしがけ
- 座敷・客間⑪書院／平書院、付書院
- 座敷・客間⑫床框
- 座敷・客間⑬建具／障子、襖、欄間

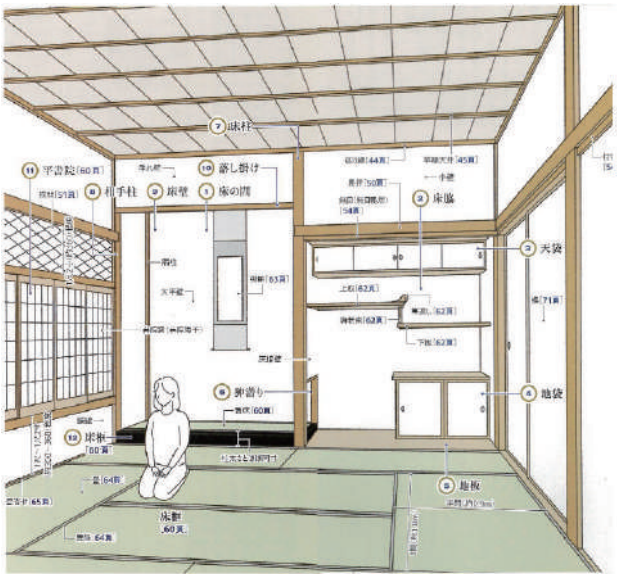


図3 書院の各部名称

C 茶室の室内構成／図4 参照

- 茶室①掛込天井 かけこみてんじょう
- 茶室②棹縁天井 さおぶちてんじょう
- 茶室③壁、袖壁、腰壁、垂れ壁
- 茶室④床柱、中柱 なかばしら
- 茶室⑤付鴨居 つけがもい
- 茶室⑥茶道口 さどうぐち
- 茶室⑦給仕口 きゅうじぐち
- 茶室⑧躐口 にじりぐち
- 茶室⑨腰張り
- 茶室⑩炉

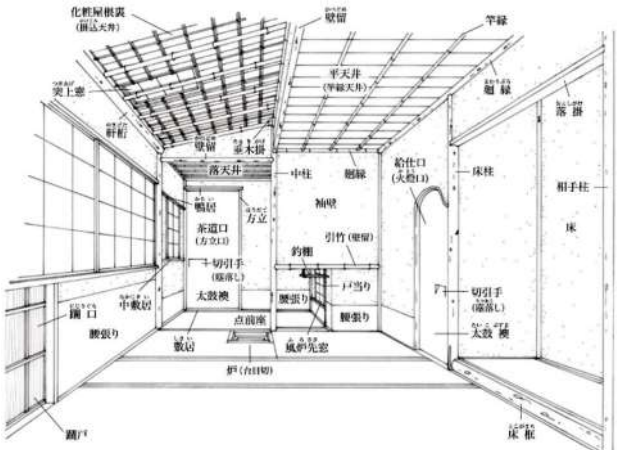


図4 茶室の各部名称

03-2 室外環境と数寄屋／重層する空間と建具による変幻自在な空間

「木割」というモジュールで「プロポーション＝割付」を作る。モジュールが決まればディテールも自然に決まっていくところに、伝統木造、数寄屋建築の妙味がある。

- ①雨戸 あまど
- ②障子 しょうじ
- ③襖 ふすま
- ④板戸 いたど
- ⑤欄間 らんま
- ⑥床脇の造作 とこわきのぞうさく
- ⑦床の間の造作 とこのまのぞうさく

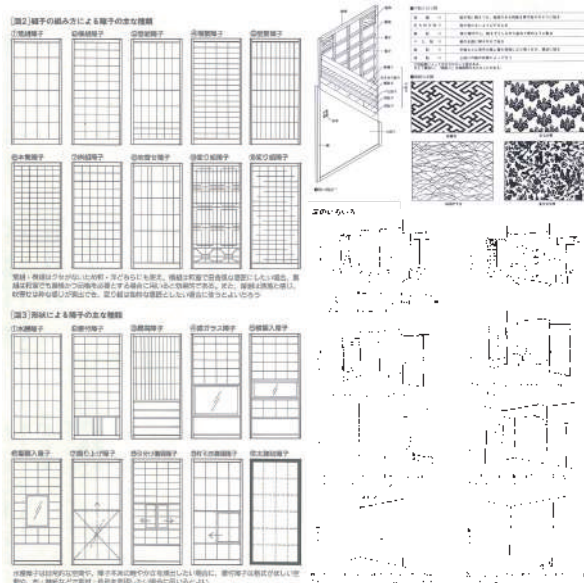


図5 数寄屋の各部名称

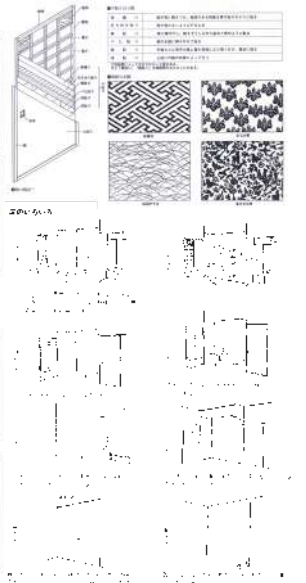


図6 床のバリエーション

03-3 「押角」の部材が作る空間感性

野物は自然に育った草木の姿を言う。これらを建築に取り入れることは、石器時代、縄文時代から行ってきた人類の歴史がある。石器から青銅器へ、さらに鉄器へと道具が進化の中で、その加工法も進化してきた。しかし、その進化を超えた美を人間は観賞する。時代を超えて愛用されてきた方法である。そしてある意味では、角に落とした材料を扱うよりはるかに面倒で難しい手法であると現代に至っては言わざるを得ないこととなる。何か文明論にも近い価値観がそこに存在する。数寄屋建築にはそのような匂いが隅々で感じられるのである。

そして、丸太の面の一部を残すように削り取った「押角」の材料には更なる対照美がある。それは切り取られた断面に現れる時と命と地球の気候が刻んだ歴史を視覚的に表現した図柄なのである。この「木目くめ」は二つと同じものはない。人間と同じである。あらゆる生物と共通した個性というものなのである。

平面である断面と、丸太材だった時の外観という姿との強烈で劇的な対比がそこにあるのである。それが「押角」の世界となる。そして、そこに照らされた光は、角材にあるような、極端な明暗の別れはなく、丸い「面皮」による明から暗へのグラデーションの美しい時間が織りなす世界を表出しているのである。床や壁に映る姿にも、そのグラデーションの世界が広がり、さらに光の干渉現象が幽玄な世界を作り出していくのである。

押角と野物を使用する数寄屋建築には、このような自然と人口との境界域にある物語が秘められていることを改めて理解し、深め、鑑賞し、暮らしを豊かにし、楽しんでいただきたいと思う。それこそが、地球共生の世界を感じられる建築であり、暮らしなのではないかと思うのである。正角⁽⁹⁾ しょうかくとプレカッタ工法の世界には存在し得ない建築が数寄屋建築なのである。

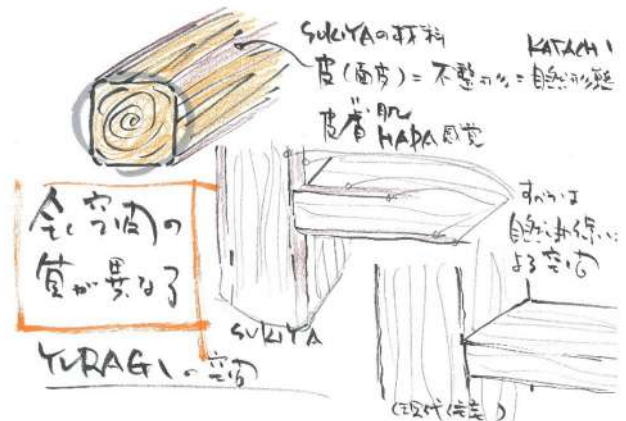


図7 押角の世界

03-4 その他の材料の役割

数寄屋造りの建築には、次のような材料が使われている。竹、杉、土壁、化粧丸太、皮の付いた丸太、奇木（変木）、朽木など。

数寄屋造りは、自然素材をただ取り入れるだけでなく、素材の良さをそのままの形で生かすことを大切にしている。たとえば、木を板状にせず丸太のまま使ったり、竹の節を生かした造りにしたりするなど、素材の持ち味を活かした建材の組み合わせが特徴となっている。また、床柱の自然形の一部を切り取るという大胆な切り落とし面（筍面⁽¹⁰⁾ たけのこめん）を見せるのも数寄屋の心でもある。

04 数寄屋の始まり

書院建築は室町、安土桃山、江戸時代を経て定式化し、大変貴重と重みのある建築として昇華されていった。その座敷空間にあって、人々の茶会が行われ、それぞれの収集品と価値観が競い合わされた。そして、その茶会もさまざまに変化していく。何を求めているのか、そこに疑問符が打たれ、その結果、詫びの精神、価値の原点を改めて深化させる動きが現れていった。すなわち禅の心を底辺に置く「侘び茶」の有り様が出現する。それが村田珠光の目指すものであり「四畳半」の世界で繰り広げる茶の世界観であった。それは、書院の中に設えた仮設の茶室であった。そこからさらに、書院を離れて、独立した空間を作り上げたのが千利休の草庵茶室であった。そこには、さらに精神世界とその表現には書院で行われる茶会とは、格段の差があり、全く斬新で徹底した詫びの精神の結晶と言えるものへと昇華したのである。その残影が妙喜庵「待庵」にあると言えるのである。

その後、利休の影響は大きく、商人から武士、貴族にまで幅広く伝わり、現代まで継承されてきた。

このような出発点を持った建築を数寄屋という言葉で表されてきた。それは茶室にとどまることなく、書院建築の室礼にまで発展し、日本の伝統空間をさらに豊かにしていった。真行草という三体の感性が建築空間にも形式化されていったのである。真行草は、それぞれの中に真行草を持ち、九通りの概念を作り上げることになる。それぞれの境界は曖昧ではあるが、精神的な特徴を言い表すものとなっていった。

さらに、明治維新を迎え、和洋混交、和洋折衷の様式が展開する中で、それは、一つの住宅形式としても発展し数寄屋住宅へと昇華されていく。戦前戦後を通して京都を中心に発展していくという歴史を作った。また、数寄屋の精神に基づく建築材料を提供し、造作していく職人集団、産地も同時に形成されていった。しかし現代では、急速に減少し、数寄屋は稀有な存在となり庶民の手から離れてしまったという現状もある。

- ①待庵たいあん／千利休の手によるものとされる茶室。「切妻造」や「にじり口」など、千利休好みの「草庵茶室」の風情が色濃い。
- ②如庵じょあん／織田有楽斎おだうらくさいが1618年に建てた茶室。
- ③密庵みつあん／小堀遠州が密庵を作ったと言われている。

05 春夏秋冬に対応する温熱環境と数寄屋の仕掛け

浮輪寮の事例で数寄屋建築と外部環境との応答や暮らし方を考える。その鍵となるのが「広縁」である。この広縁空間を介して座敷があり、また外部環境がある。

夏、最近の気候では外気温が35℃を超えることは珍しくない。しかし、庭園に囲まれている浮輪寮では、草木と土の地面、そして水盤である池があるために、輻射熱環境が大幅に改善され体感温度はかなり低い環境が得られている。(現在、具体的な環境温度を実測し分析中である) また、太陽の直射光に対しても、低い軒により室内への日射侵入を妨げている。広縁に多少到達しても、座敷はさらにその奥に存在し、直射による熱環境から涼しさを維持し室内には陰影の織りなす景色を提供している。

沖縄の古民家で見られる「雨端あまはじ」は、土庇であり、直射光を地面で受け止めることにより、気化熱作用が生じ冷却効果をもたらしている。土庇を採用することにより夏季の人間の居場所を拡大することができる。幼児の良き遊び場ともなる。

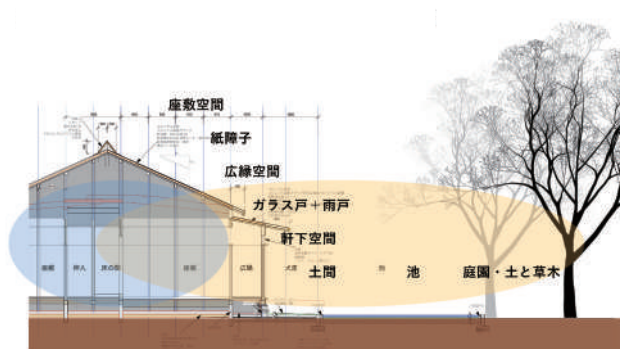


図8 重層構造の空間構成が建具の開閉によって様々な環境を作り上げていく

さて、もう一方の季節である冬はどのような形になるのでしょうか。最も厳しい寒さの中で、陽が翳っている時は、座敷の障子を閉めて外部に面するガラス戸からのコールドドラフトを防ぐとともに、雪見障子または、猫間障子を利用することで、外部の明かりを室内に取り入れ、開放感を維持する形をとる。庭園の景色も見ることができる。



図9 数寄屋建築「浮輪寮」と周辺環境

冬でも、陽が射している時には、広縁は温室となる。木枯らしが吹いていなければ、ガラス戸を開けることも可能であり、新鮮な空気と庭園・外部環境との一体的な暮らしを楽しむことができる。

冬の夜、厳冬の世界では浮輪寮のある東京都町田市でも、気温が零下になることもある。外気温3℃の時に放射冷却効果により屋根面は-14℃を観測した経験がある。夜空はそれよりも遥かに低い温度であった。そのような環境の中にあって、数寄屋建築では、外部側から考えると、まず雨戸があり、これにより放射冷却から室内を保護している。その内側にはガラス戸がある。そして広縁という空気の部屋があり断熱材としての役割

を持っている。そしてさらに座敷側には紙障子があるという構造となっている。そのためにガラス戸のガラス面で生じているコールドドラフトを座敷内に入れないという効果がある。

このような空間構成と建具の力で、室内環境を寒さから守っている。火鉢や囲炉裏のような放射熱源があれば、厳冬の夜を凌ぐことができる。

ただし、床（畳、藁または針葉樹の木繊維の畳床）、壁（土壁、紙）、天井（針葉樹の木材）、屋根（伝統的には土葺きの瓦、板葺、茅葺）の構造が昔のままではなく、断熱と遮熱対策ができていれば、この空間構造は快適なものとして有効に働くということも付言しておくなくてはならない。

養蚕が盛んだった時代には、蚕室の温度を寒さから守るために、紙障子の紙を両面に貼ったいわゆる太鼓張りしたり、さらに二重にして断熱性能を上げていたこともあった。

中間期の春と秋ではどうなるかといえば、内外部が同温となり、昼間であれば全ての建具を開放しても問題はない状態となる。あとは、昼と夜の防犯やプライバシーの必要からの開閉となる。

改めて数寄屋建築の空間構成を見ると、居住に必要な様々な条件に対して、多様な対応ができる力を、数寄屋建築は建築と建具の切り替えによって機能する能力を備えていることを深く受け止めたいと思う。

もう一つ言及すべきことがある。それは、光環境である。我々の暮らしに電気による照明が出現したのは明治以後のこと、さらに家庭にまで普及したのは戦後のことである。建築の歴史からすれば電気のなかった時代が遥かに長く、現代の住宅の形態が整ったのは、大正、昭和時代になってからと言える。昼間の太陽光をいかにして室内に導き入れるかという工夫も、電気の無い時代には建築の必須条件であった。

その時に一番に考えるべきことは、まず大きな開口を外壁に開けるということである。つまり、掃き出し窓ということになる。外部からの太陽光は上から差し込むため、広縁では床板に注がれる。床板は、光の反射板となり室内の奥深く射し込んでいく。その時、天井面からも壁面からも二次反射光が送られてくる。木板や漆喰の壁、鳥の子紙の襖、紙障子が皆白色系であることも、昼間の照明という役割を担ってのことであると理解できる。

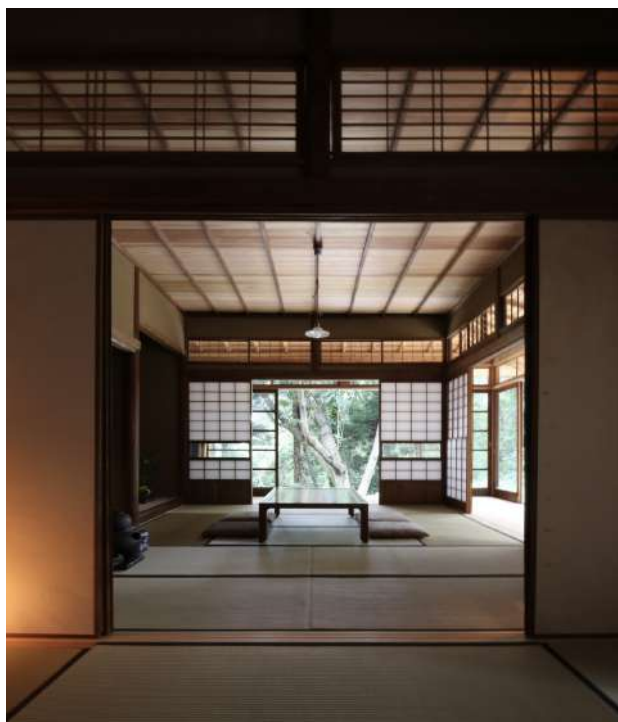


図10 数寄屋建築「浮輪寮」と太陽光環境

06 改めて広縁のもつ働きを整理する

広縁は、夏には直射日光を防ぎ、冬には暖かな日だまりをつくることで、座敷の温度を調整し、省エネと健康に役立つ効果がある。季節の変化や外部環境の変化に対して、住宅のバッファゾーンとしての役割を果たしている。各種縁側や中庭、坪庭、土庇などもこうしたバッファゾーンに該当する。

広縁は、幅（奥行き）が約 120 cm 以上あるスペースで多くの用途に活用することができる。家族や友人との集まりの場や、リラクゼーションスペース、読書の場として利用したり、庭や風景を楽しむことができる。以下さらに広縁の特徴を列記する。

- ・広縁の機能を多様化する建具の存在（雨戸、網戸、ガラス戸、紙障子、襖、簾、カーテン、ロールブラインド、ガラリ戸）
- ・外と内が緩やかにつながり開放感が得られる
- ・多くの風を室内に取り込めて、湿気がたまりにくい
- ・家族や近所の人とのコミュニケーションの場になる
- ・外出中に急雨が降り出しても洗濯物が濡れない
- ・室内から庭園への出入り口となる・掃き出しのガラス戸は、板床と共に直射と反射により、室内へ大量の太陽光を招き入れることができる



図 11 数寄屋建築「浮輪寮」の広縁

07 書院造から派生した数寄屋による建築の国風化、和風化

平安時代の寝殿造は貴族文化から生まれた。また平氏から源氏へ、そして足利氏の時代を通じて発展したのが書院造であった。

寝殿造の庭園と建築における配置計画は、大陸（当時中国は唐の時代）の文化にその原型を得ながらも独自に花鳥風月の精神基盤を背景に展開されていった。その象徴とされるのが平清盛が創建した厳島神社とされている。現存する神社建築は 13 世紀中期以後のものである。

また、武士の時代となり封建制度の発展に伴い、階級制を基盤にして出来上がっていった書院造が長い年月を経て、ようやく安土桃山時代に完成していく。三井寺の光浄院客殿はその完成形とされている。建立は 1601 年のことであり、これも安土桃山時代となる。

改めて、建築ではなく文化面から、国風化、和風化を捉えてみると、仏教とともに漢字が伝えられ、それが平仮名へと広がりが作られる中で、国文学が発展し、和歌が生まれ、女流作家による「源氏物語」や「枕草子」などの独自の文学が発展する。また、男性による「土佐日記」をはじめとする日記文学も誕生する。また、絵巻物や大和絵も文学とともに発展していく。

貴族文化は、武家社会になっても継続し併存していくことは、日本独自の政治と文化の歩みでもあった。鎌倉、室町時代と政治は武家の時代が変わっていくが、その中で建築は書院造として発展を続けた。もう一方で、中国から伝わり、独自に発展していった「茶の湯」の文化が室町時代に入ると、三代将軍・足

利義満が宇治茶を銘茶として庇護し、茶の栽培を奨励し、喫茶の習慣はさらに発展していく。その後、足利義政は八年の歳月を費やして造営し、自らの美意識を投影した東山殿は、東山文化を生み出す舞台として、かつて十二を数える亭舎が配置されたといわれている。現存する慈照寺銀閣寺はその有り様を示し、特に同仁斎東求堂は、喫茶と書院の原型と言われている。

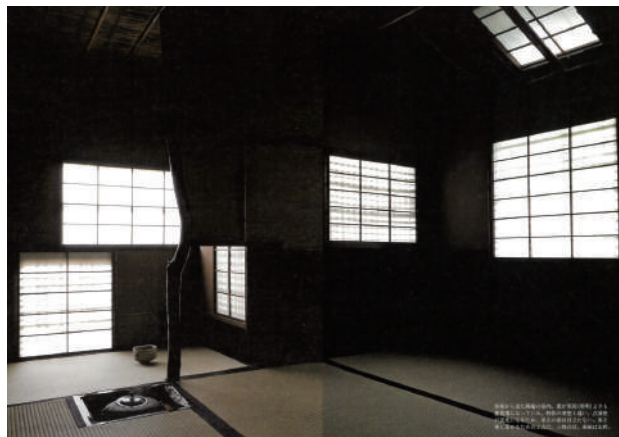


図 12 古田織部の茶室「燕庵」

その中で 15 世紀後半から 16 世紀後半にかけて、喫茶の文化は画期的な展開を見せる。豪華な唐物道具を飾り立て、にぎやかな宴会のなかで楽しむ「茶の湯」に対して、簡素な和物も使い、連歌などに代表される日本的な不足の美を求める茶の湯が登場する。村田珠光は「侘茶」の提唱者であり、それは東山文化の基調である浄禅兼帯の志向と軌を一にする。それをさらに発展させたのが武野紹鷗、千利休であった。

千利休は、村田珠光の四畳半の茶室に対し、二畳という極小の待庵を創出し提案する。侘茶の極端と言える革新であった。そして、その建築空間には数寄屋の精神が表出し、柱一本、土一粒に詫茶の哲学が込められている。

ここで本論にとって重要なことは、数寄屋が茶室に留まることなく、住宅へと発展し、接客・宴会という晴れの場にまで普及、表現されていったことにある。それは、暮らしの場における表現であり、侘茶の茶室のような特殊な作法ではない場での日常生活の中における継続的な生活時間帯の中で、人間の感性に深く関わる影響にある。言葉を変えたと、「数寄屋建築は、人間の感性の形成に大きく関わる」建築表現であると言える。

ここで改めて、茶室と住宅をはじめとする一般建築との違いを述べておくことにする。これは、一茶人（まだまだ未熟であるが）でもある私の特殊な考え方もかもしれないが、茶室の実態を次のように理解している。

亭主の作った庭園に入り待合での時間を暫し過ごす。そこで、作られた庭園の有り様を感じ理解し、亭主の哲学を知る。そこには待合と雪隠も備わり、亭主の心使いを知ることができる。そして再び立ち上がり、露路を歩き茶室へと向かう。手水鉢とその周辺の設に、また新たな亭主の表現を観る。そして、躰口から潜り入場する。床とその周辺の室礼、道具立て、茶室全体の空気を読み取る。

しかし、室内からは庭園の景色は見えない。障子と窓格子を通しての景色しかない。そこには、梢に揺れる光と影、外界から聞こえる様々な音、さらに自分自身が露路、庭園の中で経験した記憶、それらの総体が茶室に居る自分に作り出してくれる「抽象画」を感じ観ることになる。これが詫茶における茶室の有り様なのである。したがって、窓から庭園を望み、広縁から庭園へと立ち入るような建築とは大きく異なるのである。本論は、こうした特殊な茶室の世界ではなく、住まいとしての数寄屋建築の機能と精神的な影響について論考していく。

建物のシルエットが自然界に馴染む生命曲線
 外界にある自然界と最も馴染む形を持つ
 紹介の柱梁と異なり
 陰翳のグラデーションを持つ

08 「押角」の世界が奏でる親自然の世界

柱と梁、鴨居の加工材として、最も数寄屋らしい姿は、木材の丸太の皮部分が残された加工法である。数寄屋大工の世界では「まるもの」と言われてきた。この加工は「かくもの」と比べたらはるかに手間がかかり大変難しい加工となる。何しろ自然曲線同士を組み物となるからである。その結果は全ての仕口は異なる形状を持つことになる。論より証拠、図を見ていただいた方が、理解は早い。図7を改めて参照のこと。

09 現代住宅の矮小化

戦後の復興のための住宅と高度経済成長、大手住宅メーカーによる商品化住宅、そして最近の高気密高断熱化住宅、さらにいわゆるマンション居住の拡大と浸透、地価の高騰と住宅敷地の狭小化、これらの一連の動きの中で、住宅建築とその周辺環境との一体的な建築のあり方が矮小化され、住宅建築はいわゆる「うさぎ小屋」になってしまったのである。戦後 80 年が経過しようとしている今日、もはや復興ではなく、本式の「日本の住まい」を取り戻してほしいと願うのである。

日本社会は、急速な人口減少の最中にあり、大名屋敷が千近くあった江戸時代の豊さに近づきつつある。というのは大袈裟すぎるのかもしれないが、再び豊かな大地と豊かな住環境を取り戻すことが可能なように考える。過剰なほど大都市圏に集中しすぎる価値観と経済のあり方を変えていけば、日本の国土は十分に広大である。清らかで豊富な水と森林褐色土に覆われた地味豊かな大地、山があり、川があり、海があり、四季がある日本、この大地にふさわしい暮らし方があって良いはずである。それこそが日本の宝であり、世界中の人民が憧れていることなのである。

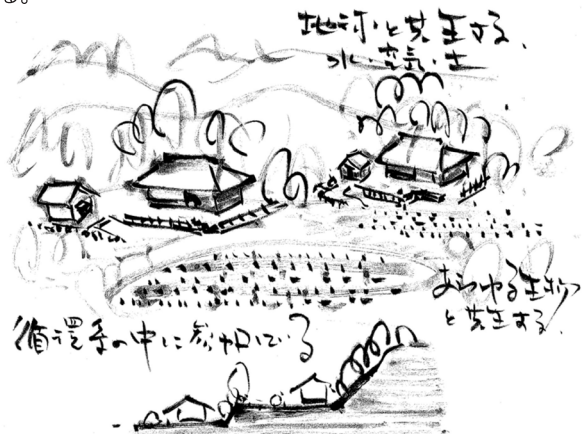
[illegible]

図 15 現代住宅は人間と周囲環境とを隔絶している

1 0-0 1 襖の「道具」 1 和紙とからかみ
1 0-0 2 襖の「道具」 2 金物
1 0-0 3 座敷の「道具」 屏風
1 0-0 4 座敷の「道具」 棚、板
1 0-0 5 座敷の「道具」 膳と食器
1 0-0 6 座敷の「道具」 掛3
1 0-0 7 座敷の「道具」 花器
1 0-0 8 座敷の「道具」 炉、風炉
1 0-0 9 座敷の「道具」 火鉢
1 0-1 0 座敷の「道具」 吊り金物
1 0-1 1 座敷の道具「茶筆筥」
1 0-1 2 座敷の道具「環境用具」 簾、夏障子
1 0-1 3 数寄屋の建材 1 木材
1 0-1 4 数寄屋の建材 2 竹、草
1 0-1 5 数寄屋の建材 3 石、手水鉢、灯籠



図 16 桂離宮 松琴亭 図 17 京からかみ 図 18 襖金物

11 フレキシブルな「間」が家族構成の変化に応じて自在に対応する「日本間」

日本の伝統的な家屋では、寝室や書斎という言葉はなく、六畳間、八畳間というように広さでそれぞれの間を呼称してきた。それは、目的的な固定した室礼を必要としなかったためであった。言い換えれば、ベッドではなく布団が「寝る」という行為に対応し、押入という収納空間がそれを可能とした。布団を押入にしまった途端にもはや寝室ではなくなるのである。また、書斎に使おうと思えば、書斎机をそこに置けばよかった。書籍は納戸に置けば問題はなかった。季節ごとに変わる道具や室礼も納戸または外物置に収納し対応してきた。建具まで夏型とそれ以外の季節に交換してきた。改めて、このサスティナブルで自由な変化のある暮らしを再評価し日本の未来の住宅へと進化活用していただきたい。布団による睡眠は、フランスをはじめとする諸外国でも熟睡できると最近採用され始めている。

食卓周りも同じことが言える。台所と便所、洗面所、浴室については、どのように家族構成が変化しても変わることがないため、動線への配慮がなされていれば、これは固定的でも問題なく、多様な住宅の変化に対応できる。このようなあり方を再考し日本の風土と暮らしに合った住宅建築の再構築を望むものである。

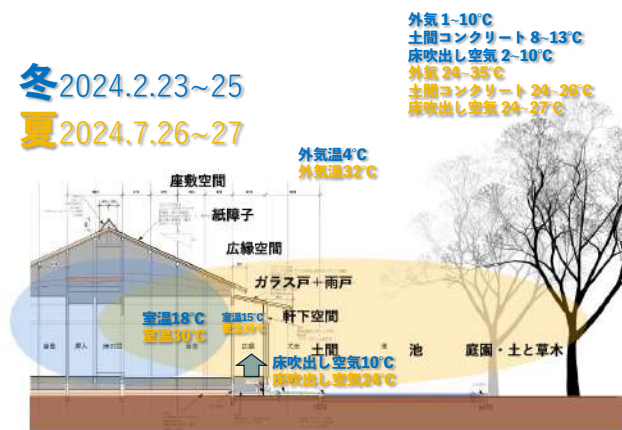


図19 浮輪寮は、太陽熱、放射冷却、地熱などの自然エネルギーの活用によって、省エネでの室温維持ができています。

12 まとめ／総じて数寄屋の現代的価値と日本の住宅の行方

最も大切なことは、住宅は「箱」ではないということである。外部環境と室内とを「箱」で隔てることは、エアコンで室内の暖冷房を行っていることと同じ意味を持っている。内部を外界から壁によって隔絶し、内部の快適を実現しながら、外部へはさらに環境を悪化させている現象、夏は外に排熱を捨て、冬は内部に熱を取り入れるために外部をさらに冷却しているという現象と同じであり、人間というより自分だけの利益のために外部に背を向けている「科学」を信奉していることは、傍若無人の振る舞いに過ぎず、本末転倒とししか理解できない。人間の暮らしは地球と共にあり、他の生物とも共生しなければ未来はない。数寄屋建築は、そうした現代文明への警鐘であり、我々人間が戻るべき住まいのあり方を指し示しているのである。そして、改めて現代科学の目で開眼し、それを進化させていくことが人類の進むべき道と考える。そのために学ぶべき要素を整理したものが今回の論文となる。まだまだ浅薄な論究ではあるが、次の世代へと研究も暮らし方も継承してもらいたい。

- ・人間と地球環境、人間と住宅建築と周辺環境との関係のあり方を描き、豊かな暮らしと人生を提言する。
- ・太陽と水、雨水と大地、これを司る生命の仕組みに感謝し、それを洞察し、その仕組みに見合った「水の循環」、「土の生成と利用」、「命の循環」、のあり方を学び、その循環の道に沿う人間と人間社会の暮らしを創造する。経済活動についても同様である。
- ・必要とされるエネルギーと使用機器への根本的な見直しを図り、資源とエネルギーの循環する仕組みを提言する。
- ・天地四時に感謝し、春夏秋冬の暮らしの循環に従い、それらに対応する暮らしと住宅建築を実現する。
- ・固定的な建具だけではなく、日本の暮らしの歴史の中で発展してきた自由自在に変化し交換できる「建具」の多様な機能と感性を生かしさらに発展させる。
- ・真理に従えば、天地一指の豊かな循環が生まれ、人々の暮らしと生き方に自ずと道が生まれるはずである。
- ・適材適所の建築構造と改変への歩み方、維持管理のあり方を描き提言する。

〔注〕

- (1) 面皮めんかわ／木材の角に皮の部分を残したもの
- (2) 下地窓したじまど／土壁の小舞を見せた開口部
- (3) 野根板のねいた／屋根下地の野地板を化粧天井としたもの
- (4) 長押釘隠しげきかくし／長押を抑える釘を隠す飾り金物
- (5) 縁桁えんげた／縁の屋根を支える磨き丸太の桁材
- (6) 村田珠光むらたじゅこう／
- (7) 武野紹鴎たけのじょうおう／
- (8) 千利休せんりのきゅう／
- (9) 正角しょうかく／柱や針などで角が取れているもの
- (10) 笥面たけのこめん／床柱の根本が太いため切取った小口
- (11) コールドドラフト／ガラス面で冷却された空気が足下にも流れる現象
- (12) バッファゾーン／温熱、生活、プライバシーなどに対応する緩衝空間

〔図版出典〕

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| 図1 毎日新聞社、毎日グラフ別冊 1983「修学院離宮」 | 図13 作図 丸谷博男 |
| 図2「図説・木造建築辞典基礎編」学習出版社 | 図14 作図 丸谷博男 |
| 図3「建築知識」2023年9月号 株式会社エクスナレッジ | 図15 作図 丸谷博男 |
| 図4 裏千家 ホームページ | 図16「美しい日本、この一枚」HPより |
| 図5 木のデザイン図鑑 建築知識別冊 | 図17 KATSURA 新建築社 |
| 図6 建築の造作図集（上）理工学社 | 図18 小澤金物店ホームページ |
| 図7 作図 丸谷博男 | 図19 作図 丸谷博男 |
| 図8 作図 丸谷博男 | |
| 図9 撮影 丸谷博男 | |
| 図10 撮影 丸谷博男 | |
| 図11 撮影 丸谷博男 | |
| 図12 利休入門 木村宗慎 新潮社 | |

＜ご報告＞

■2024年9月19日・10月14日・10月21日・11月18日

理事会を開催しました。

■2024年11月10日

幹事会を開催しました。

■2024年11月29日・30日・12月1日

第11回全国大会を開催しました。

エコハウス研究会

代表理事 丸谷博男(株式会社エーアンドエー・セントラル代表取締役)

理事 若原一貴(日本大学芸術学部教授)

理事(事務局長) 磯貝左千夫(株式会社ジェイボックス代表取締役)

会報2024年冬号(第20号)2024年12月10日発行

エコハウス研究会会報
そらどま
2024.WINTER vol.20

